

市民のニーズを
活かす・つなげる
あきしま会議

「役員になってほしい…」

「仲間を増やしたい…」

「活動場所がない…」

実施報告書

平成30年5月19日（土） 午後1時から4時

市役所 602-603 会議室

講師 近藤牧子氏（早稲田大学等非常勤講師）

はじめに

第 29 期昭島市社会教育委員会議（任期 平成 28 年 10 月 1 日～平成 30 年 9 月 30 日）では、市民のニーズをどのように捉え、活かし、つなげるかについて、これまで議論を重ねてきました。その中で、市民の活動とはどういうものなのか実際に活動者から話を聞くことによって、より具体的な市民ニーズに対する方策が見えてくるのではないかと考え、生涯学習部社会教育課とともに本研修会を企画しました。

平成 30 年 5 月 19 日に実施した本研修会では、市内で活動している様々な団体の方にご参加いただき、小グループに分かれて、互いに語り合う「ラウンドテーブル」を行ないました。

この報告書は、本研修会の参加者と、ファシリテーターから、改めて本研修会の感想等をまとめたものです。今後の皆さんの活動を支える一助となれば幸いです。

1 グループ

【活動報告】

- ボーイスカウトの団委員会について
- 昭島生涯学習サポーターの会 まなぶん について

報告者より（１）

①報告しているときにご自身が感じたこと

ありのままの実状を伝えようとする、専門用語(ボーイスカウト用語)を使ってしまい、その言葉をわかりやすく伝えることが難しい。また分からない方々に細かいところまで話過ぎてしまったかと思いました。

②報告後、ご自身の感じた気づきや変化、思いついたことなど

報告したことがらについて共感していただけると、進めていた課題を更に頑張ろう、改善していこうと思えました。

③全体的な感想

報告者は班分けしないで全体に報告するのかと勝手に思い込んでいて、皆さんの報告をすべて聞けるものだと思っていました。(聞きたかったです！)

報告者より（２）

①報告しているときにご自身が感じたこと

報告中、下を向いている人が目に入り、「ああ、興味を持たれていないのだな。生涯学習という言葉や、絵本のことなんて…」と感じ、ゆっくり話さなくてはと思い直して続行。しかし、私自身もう一人の方の報告の際、内容が私の普段の生活から全くかけ離れているもので、つい、熱心に聞いているようにしなければということを思ってしまい、他の人にとって、ご自身の知らない活動に興味を持ってもらうのは難しいと感じました。

②報告後、ご自身の感じた気づきや変化、思いついたことなど

報告後、グループの方々の発言の中に、「そういうことはすでに市民大学の卒業生が熱心にやっている」とか「イキイキニコニコ介護予防教室では、何クールも講座を受け続けている人がいる」というような意見を聴くと、もしかしたら、生涯学習サポーターの会の役割はその２つで十分なのではないかとも思った。

③全体的な感想、その他

今回は、第1回目ということもあるのか、「私はこれをやっています！」というように自分のやっている活動のお披露目会のような感じでした。いろいろな活動を分野別（カテゴリー別）にして、自分の興味に沿った内容のところに参加するともっといいのではないかな。

ファシリテーターより

①議論したこと

「ボーイスカウトの団委員会について」

- ・ボーイスカウトの活動が一般の人に知られていない。子どもの習い事が多様化する中で、メンバーとなる子どもが減っている。少子化だけではなく、活動の問題である。ボーイスカウトは山の中に行くのではなく、地域との関わりをもち、いろいろな人に活動が見えるようにしなければならないのではないかとこの転換点にいる。「山ではなく駅へ」。
- ・質が良くなければ人はやめて行ってしまうが、指導者が技術（ロープの扱い方など）を教えがちなところがある。リーダーの講習会をやっている。子どものやりたいことの中に、教育的なものを見つけるのが指導者だと思う。指導者のやらせたいと、子どものやりたいには違いがある。目的は子どもの自主性をつけていくことであり、大人のかかわり方の度合いが難しい。「ハンドブック」が一応あり、それに則るが、その枠に対するジレンマがある。その枠よりも「もっとできる」「もっとやらせたい」が出てくる。しかし、活動が活発になればなるほど、大人の数も必要になり、保護者のボランティアも重要になる。
- ・カブスカウトからボーイスカウトになる時で辞めてしまう人が多い。部活もあるし、ボーイスカウトで求められることが厳しくなることに、親がついていけないこともある。もっとも、自主性への転換点であるがゆえだが、そのためにボーイスカウトの活動をしているともいえる。よって、年齢が下の子たちの活動は厳しく、上の子たちには優しくするなどの工夫を考えている。
- ・普及については、「会」を開くより、SNSやウェブサイトの効果を感じているため、今後力を入れていきたいと思っている。
- ・保護者をお願いをする前に、雑談、飲み会で調整をすることの重要性を感じるようになった。昔は「ノミニケーション」が嫌いだったが。
- ・組織としてやりたいことを達成するときに諦めない。昔は、SNSは難しいと言われてたが、やり方を若い人に教えてもらってやろうということになった。団委員会のメンバーが一新したのを契機に、昔からのやり方を変えていく。
- ・指導者に対して上下関係がある中で、保護者から言いづらいことを受け入れていくように変わっていきたいと思っている。

- 女の子のメンバーも出てきている。今後は男女共同についても取り組む予定であるが、男の子だけが良いという意見もある。

「あきしま生涯学習サポーターの会 まなぶんについて」

- 「生涯学習サポーター養成講座」終了後、予算ゼロで企画をするという課題があったが、難しすぎて、人がどんどん減っていった。現在は3～4人ほどで活動をしている。
- 「生涯学習サポーター」と聞いて、金曜日が空いていたのと、平成32年ごろに（仮称）教育福祉総合センターができるため、そのスタッフになる人の養成という気持ちで参加した。仕事を辞めて何かやろうという人が多かった。
- 自分が長年やりたかった「シニアの読書の会」のようなものを、「やってみればいいじゃない」という声をもらって実現した。だから、自分もその言葉をほかの人に言ってあげたい。
- まなぶんが取り組んでいる活動一つひとつの説明をしてくれた。特に「あきしまカルタ」のことを多く語った。
- 仕事をしていた時は、手帳が真っ白だったが、今は真っ黒である。充実している。

②議論のポイント（ファシリテーターの読み取り）

第1ラウンド

- ボーイスカウトの普及について

→伝統的な活動と、現代に合わせた活動との葛藤をどう乗り越えていこうとしているかについてがポイントになった。男女共同については、年配の方が、「それは昔から女の子はガールスカウトに行けばよいのだから」という発言に対し、うーんと首をかしげる方が何人かいた。また、その方は「ボーイスカウトの伝統を守ることを優先してほしい」とおっしゃっており、ボーイスカウトに対する「伝統的」な声を代弁する役割となって、むしろ問題提起となったが、お互いに遠慮があり、「でもね」という展開はそれほど活発にされなかった。

- 指導者のあり方、子どものあり方、親のあり方

→話のポイントは、①にもあげたような指導者、保護者、子どものあり方についてだった。ボーイスカウトという団体の指導者への「粹」、肝心な中学生期に子どもが減る問題、保護者の手伝いとコミュニケーションのあり方がポイントとなった。メンバーは、ボーイスカウト側の目線である人が多かった。保護者的な立場の意見があまり出なかった。

第2ラウンド

- 「生涯学習サポーター養成講座」とは一体何か

→その講座で、どんなことをするとよいのかということの意見交換をした。「まなぶん」が修了生の受け皿であれば、そこにつながる何かが必要。3回では少なすぎることや、そ

の講座でやりたいことを実現するようなしかけはどうかといった意見が出された。また市民大学との違いについて意見交換された。市民大学は、自分が勉強したい人、調査したい人が集まるが、それを市政に還元したり、地域づくりに還元するようなくみが必要なのではないかという意見が出た。(その中で A バスの時刻の不便さについても出た)。

③グループの様子

- ボーイスカウトの活動に詳しい方が2名いらっしゃった。質問に対してその皆さんで答えくださった。
- 皆さんが適度に話をしており、和やかだった。テーブルの場でお互いの活動がつながった方々もいた。
- 報告者が顔を上げて話しているときに、レジュメをご覧になったまま下を見ている方が多いのが気になった。ただ、コミュニケーションに問題はなかったなので、気恥ずかしさのようなものがあつたような気がした。
- グループでの話し合いが、地域づくりの提言のヒントとなるような「会議」になった（A バスについて、市民大学について）。
- 異なる意見の出し合いになるには、遠慮があつた。

④ファシリテーターが感じたこと

- 自分は唯一の「昭島以外の人」であつたので、それを役割として事実関係を聞き出していた。
- お一人、お話しするけれど遠慮して発言が十分でなかった方がいらっしゃった。話しすぎる方はいなかったが、時々ブレーキが必要だった。
- 付箋は報告者の方はとても喜んでおられた。
- 話が地域の問題の出し合いになったときに、本筋に戻していった。
- 皆さんお話上手、聴き上手だった。



2 グループ

【活動報告】

- 弓道教室について
- 劇団 Firstline について/テnderハート昭島 TOKYO 体当たりについて

報告者より（１）

5月19日に開催された社会教育委員会主催の研修会において、先ず感じたことは、参加された皆さんの社会貢献への意識の高さでした。参加された皆さんがいろいろな場において活躍されているからこそこの報告であり、質問であったと感じました。

はじめに、講師の先生から報告や質問に対しての否定や反対意見などをせずに、また報告者に同調しながら話を進めていくとの説明がありましたが、まさしく「聞き上手の話し上手」を体現できたような気がします。

報告者として、弓道教室の話をさせていただきましたが、弓道は馴染みの薄い武道であると改めて感じると同時に、巡り合う機会さえあれば、始めてみたいと思っている人もいるのだと感じました。

拙い報告ではあったのですが、報告中は同席者の上手な質問により、書き足りなかった部分も引き出していただき、何とか無事に終わることができました。報告中に、いくつかいただいた質問の中から感じたことなのですが、ルールが重要視される現代のスポーツにおいても、相手に勝つためならば手段を択ばない例もみられる昨今ですが、弓道のように精神面を重視して、常に自分自身を見つめ、礼儀と至誠を尽くすことの大切さを知っていただくためにも、この活動を続けていかなければならないと思いました。

今回の研修において、他の様々な団体の活動の内容や実情を知る機会に恵まれたことと、どの組織においても一つの信念をもって、活動のエネルギーとして続けていることに感銘を受けました。

報告者より（２）

①報告しているときに自身を感じたこと

報告時間が50分あると聞き心配しましたが、始まってみれば、あっという間でした。テーブルの皆さんが熱心に聞いて下さり、またファシリテーターの進行で、とても話しやすかったです。

ファシリテーターが、私の説明不足の点について、補足的に質問をしてくださるので、安心して話すことができました。よい報告のためには、ファシリテーターの方やテーブルの皆さんの質問がとても重要だと感じました。

②報告後、ご自身の感じた気づきや変化、思いついたことなど

長く活動が続けていく中で、自分達には当たり前になっていることも、他の方には分からないことがあるということを実感しました。テンダーハート昭島の活動については、実際に見てみないと分からないかもしれませんが、たくさんの方に広めたいという思いで活動をしているので、自分達の団体を全く知らない方の反応や質問は、とても貴重だと思いました。

報告するために話す内容をまとめたり、実際に報告することで、自分の活動について整理することができました。他のメンバーにも、機会があれば、報告してもらいたいと思いました。

また、日々の活動に取り組むだけでなく、報告したり、質問に答えるためには、活動記録をとっておくことも重要だと感じました。

③全体的な感想

もっとたくさんの方の報告を聞いてみたいと思いました。大きいグループになれば、より多くの方の報告を聞ける利点がありますが、逆に、緊張して話しにくかったり、質問がしにくかったりすると思います。大きすぎず、小さすぎず、適度な人数設定が必要そうです。

私が報告をしている途中で、質問をされた方は、いらっしゃいませんでした。今回の会議では、質問がとても重要だと感じました。自分から質問をするのは難しい場合もあるので、ファシリテーターの方の進行がとても重要だと思いました。

ファシリテーターより

①議論したこと

第1ラウンド

会に新しい人を誘う時の端的は「誘い文句」はなにか、なにが魅力か。

弓道教室の参加者を高校生以上としているが、報告者は中学生からがいいと感じている。

高校生以上がいいというメンバーの理由、報告者が中学生からがいいという理由。

優劣を競い合う武道ではない「弓道」の魅力→「道徳」とのつながり、社会の基礎。

メンバー間で参加可能時間数の差、役割を担える、担えない差をどう感じているか。

第2ラウンド

活動を始めたきっかけ、その時の思い、活動してみてどう感じているか。

活動をとおして、自分の意識でかわったこと、日常に活かされていること。

他者の力を信じる、相手のことを考える→グループの参加者が、それぞれの活動、生活の中でも大切と共感。

②議論のポイントをファシリテーターがどう聞き取ったか

グループとして議論にまでは、いかなかった。

報告の事実の確認（共有）と、報告者の思い、感じたことを聞くこと、深めることが主となり、グループはそれに、共感したり、自分の活動での経験をシェアしたりした。

③グループの様子

みんな報告者の報告に好意的に耳を傾けていた。

途中で発言をしていいルールになっていても、途中発言、質問する人は少なかった。一人が話し出すと、同調して発言する、または、話をふられると発言しやすい。

④ファシリテーターが感じたこと

自分のいい経験になった、楽しかった、自分のためになった。

議論をするには時間が足りない（報告の後半はかけあしになってしまった）。

（報告、内容の事実の確認、思いなどを伺っているだけで、あっという間の時間だった）

ラウンドテーブルで、どんなことをしていたのか、得られるのかの説明が、ラウンドテーブル後に総括で話されたが、そのほうがいいのか、事前に伝えるほうがいいのか。

（報告を「聞く」と思い参加しているのかも…頭に浮かぶことがあっても、「聞く」立場だから…と「聞き役」になってしまっていないか）

市民同士、活動者同士、グループで発言する、質問する、自ら感じる、気づく→とても貴重な機会、ファシリテーターも含め、いい気づきの場だと思う。



3 グループ

【活動報告】

- 「地域文化の会」
- サークル杵柄（さーくる きねづか）

報告者より（１）

①報告しているときにご自身が感じたこと

「地域文化の会」について、改めて活動内容をまとめて、グループに参加された方々に説明することにより、いままでの活動について振り返ることができました。

報告した中で、1 番考えさせられたことは、「地域文化の会」の今後についてです。

会員は当初に比べると減少していますが、会員の増員を図るのではなく、活動してきたことをいかに地域に還元していくかについて、グループに参加された方々から、地域の人たちにも協力してもらうことを提案されました。このことについては、会の例会では話し合ったことがなく、とても新鮮な意見でした。

私の実践を聴いて、「様々なテーマを熱心に学び、市民に還元しようという姿勢に感激しました。」といった意見をもらうことができ、うれしかったです。そして、共感できたこととしては、グループの方々も「会員が増えないという悩み」を共有していることが、わかりました。

②報告後、ご自身の感じた気づきや変化、思いついたことなど

会の継続には、会員を増やし、会の活動を拡大していくことも大切ですが、それ以上に会の活動をしっかり行い、無理をすることなく発信することも可能ではないかということがわかりました。今後の活動をより充実したものに、地域に少しでも還元させることができればと思いました。

③全体的な感想

グループ分けはバランス良く出来ていて、意見交換も活発にできました。自己紹介については、グループ全体でなかったことは、少し、もの足りませんでした。それでも積極的にグループに参加した人たちが発言していたのはよかったです。

具体的な活動報告から話し合うことになったので、問題点も浮き彫りになり、実践的な解決策も提案され、今後の活動にも生かされるものでした。そして、「ひとりで抱えこまない」「楽しんでやる」という意見が印象的でした。

報告書が今後作成されて、他のグループで話された内容も知ることができそうなので、その内容もしっかり読み込んで、取り入れることがあれば活用していきたいです。

まとめで近藤先生が話された、「記録作りと報告をする」ことの大切さを実感しました。また、この会議を定期的実施することにより、今回報告しなかった団体や、多くの参加していない団体の具体的な活動内容を知りたいです。

報告者より（２）

①報告しているときにご自身が感じたこと

50 分も持ち時間があるとは思っていなかったので、初めから報告しながら、感想や他の団体・活動に対する意見交換のためのプレストとして行いました。

②報告後、ご自身の感じた気づきや変化、思いついたことなど

皆さんのそれぞれの課題や悩み事を伺い、また工夫している点や参考になる事柄も多く伺う事が出来たので、有意義な時間でした。

③全体的な感想

はじめて参加しましたが、様々な人たちとお話することができ、とても充実した時間でした。また機会があれば参加したいと思います。

ファシリテーターより

ラウンド 1

①議論したこと

- ・「地域文化の会」は公民館が主催した昭島市民大学の第 1 期生（平成 14 年 9 月から 2 年間）を修了した者のうち、「地域文化コース」のグループが母体となっている。
- ・市民大学は、2 年間のカリキュラムが設けられており、1 年目は公民館が主導となって、月に 1 回昭島に関する財政、環境、地域文化などを学ぶ。2 年目は全体を 4 つのグループに分け、グループごとにテーマを決めて取り組む。
- ・「地域文化の会」は、平成 17 年から平成 23 年まで昭島市民文化祭に出展してきたほか、自主講座として「江戸後期・昭島庶民の暮らし」「江戸後期の学びと食」をテーマにし、それぞれ 5 回シリーズを企画・運営してきた。
- ・当初 10 人ほどいた会員は、いろいろな事情で抜けてしまい、現在は 4 人で活動している。そのため、市民文化祭への出展も自主企画講座もできなくなった。
- ・会合は月に 1 回開催し、その時々に関心のあることを取り上げて話し合っている。
- ・会員を募集しても定着せず、一向に増えない状況にある。

②議論のポイント

・会員の募集について

- 市民大学を修了した者相互の連携や情報交換を活発にすれば増員が期待できるのではとの意見があったが、修了した期により考え方に違いがあったりして、連携してやっていくのは現実的ではないとのこと。
- 会員を求めていることなど情報が伝わっていないのではないか？ということで、参加者がそれぞれ取り組んでいる団体の情報発信について、持参したチラシなどを見ながら記載内容や集客の方法を紹介し合った。
- 既に形ができているところに、新しい人が入るには敷居が高い。入りやすいような環境を作らなければ、人が来ないのも当然。ほかの団体の報告にも参加するなどこちらからの歩み寄りも大切である等、参加者からは会員募集に取り組んできた実例を踏まえた議論がポイントだった。
- ・学ぶことは、今のメンバーで充分だが、市民文化祭などで報告するためには人手がいる（本音は、報告に当たっての人手が欲しいということのように感じられた。）
- 会員の募集ではなく、お手伝いをお願いすることで募集すれば良く、手伝ってくれた人が、興味を持つようになってくれれば結果として会員が増えることにつながるし、このような方法であれば敷居が高いと覚えることも少ないのではと、報告することをポイントにした議論となった。

特定の参加者が話し続けるということではなく、全体として平均していた。報告者以外の参加者が、所属する団体のチラシを持参してきており、そのチラシを披露するなど熱意が感じられた。「会員を増やすこと」と、どこでも共通するような話題だったので話が途切れることがなかった。（そのことばかりに集中しすぎて、お悩み解決します的な「相談コーナー」になってしまったように感じられた。）

ラウンド2

①議論したこと

- ・このサークルの名前は、「昔取った杵柄」の「杵柄」からとったもので、5年目を迎える。月に1回第2火曜日の10時から12時に定期的で開催している。
- ・座学が中心で、主婦や外国人、経営者など様々な会員がいる。
- ・テーマは特に設けず、毎回の話は政治や経済の話題から昨日テレビで見たことなど多彩なジャンルに及んでいる。
- ・活動の目的は、コミュニケーションを行うことで、話題はそのきっかけに過ぎないこと。初めて参加した人は、話がいろいろな方向に展開していくので、戸惑ってしまい付いて行けないこともある。
- ・いろいろな意見が出てきて、意見の食い違いが生じるが、それがこのサークルの重要な

要素なので、話をまとめるようなことはしない。それぞれが、人の意見を聞いて、そのことが何かの役に立てばそれでよい。

②議論のポイント

- ・活動日を定例化すること

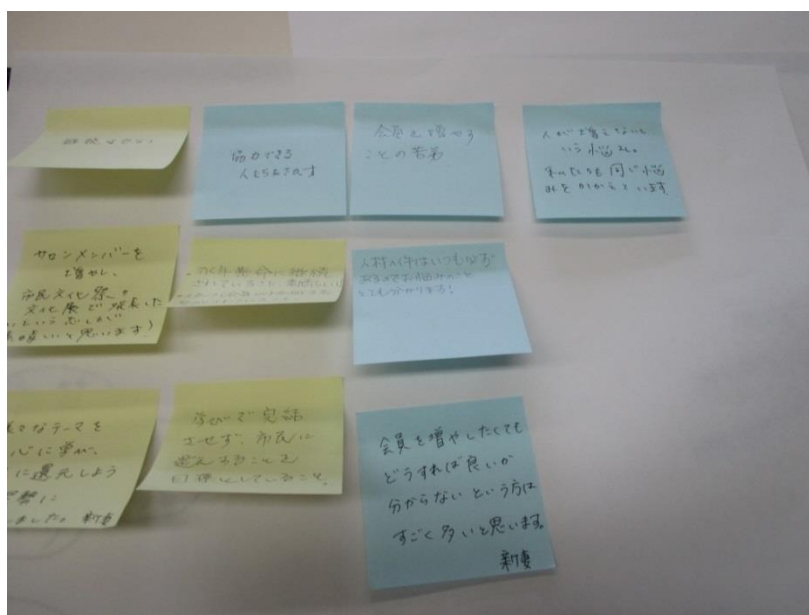
→ 集まる日を固定化すると、集まりやすい。第2火曜日というのも、月初でも、月末でもない。また、週の初めでもなく週の終わりでもない集まりやすい日ではないか。水曜日は結構いろいろな用事がある。午前中というのも集まりやすい時間帯である。

- ・情報検索の方法について

→ 報告者はNPO法人の代表者でもあるので、法人業務の関わりや人集め、情報の取り方の話から「情報の検索方法」に話題が飛んでしまった。(が、「情報提供のあり方」など市民からのニーズも高く、個人的にも興味があったので軌道修正はしなかった)

「人手を得る」ことについて、ある参加者から、「やりたいのだけどちょっと手が足りないよね〜。」という、お手伝いが得られるとの話があった。自分で背負いこまないことが、大切であり、長続きさせる秘訣のようだった。

このサークルからは、人を増やしたいという話はなかった。テーマも特定せずに開催して、5年目を迎えるとのことに驚いた。何かに縛られずに、自由に発言し、結論を求められない時間の過ごし方に魅力があるのだろうかと感じた。



4 グループ

【活動報告】

- 社会教育委員としての活動を振り返って/小学校での土曜補習教室について
- 「多摩りばクラブ」について

報告者より（１）

①報告しているときに感じたこと

はじめての人に、自分たちの活動をわかりやすく説明することは、思っていた以上に難しかった。経緯を丁寧に説明する、専門用語はなるべく使わない、etc…いろいろと気をつけたつもりではあったが、まだまだ不十分だったと思う。「どう伝えるか」ということ以上に、「何を伝えるか」が重要だと感じた。「活動の内側」にいる自分と、「活動の外側」にいる聞き手では、必要とする情報が違う場合があると気づかされた。また、事前の準備や練習を否定するわけでは決していないが、報告前の「〇〇を質問されるのではないだろうか」、「●●はあまり関心を持たれないだろう」という予想は、あまりあてにならないのかもしれないと思った。いい意味でなりゆきに任せることで、有意義な報告や議論ができると感じた。

②報告後、感じた気づきや変化、思いついたこと

自分たちの活動について、新しい視点を持つことができた。私が報告した「小学校での土曜補習」を例にあげると、これまでは「子どもたちにどう教えるか」ということばかりに意識が向いていたが、報告後に議論を重ねていくなかで、「子ども(参加児童)が喜ぶのはどのようなときか」、「大人(指導員や先生)が喜ぶのはどのようなときか」などといった、それまでには考えたことがなかった視点に出会うことができた。

③全体的な感想

今回、私は報告者として参加したが、このような形式の会議においては、実は主役は聞き手側ではないかと思った。私のテーブルの場合、「小学校での土曜補習」と「多摩川での自然体験」という、一見あまり関係がなさそうな２テーマであったが、聞き手の方々がうまく共通項を見つけてくださった(どちらの活動にもあてはまる議論となるように議論を進めてくださった)ため、非常に良い意見交換ができた。報告者は、自分たちの活動について知識を持っているため、ある程度以上の説明はできるはずであるが、「活動の外側」が求めていることを把握することはどうしても難しい。２つの事例を客観的に見つめ、「話し合いをどう進めていくか」を判断することができる、聞き手の役割は、やはり重要だと思う。

報告の中で、自分たちの活動の詳細な紹介、勧誘があっても構わないと思うが、参加者全員が収穫を得るためには、「報告事例の枠のなかで活かせること」よりも一段階上がった、「参加者それぞれの活動に活かせること」にまで一般化させることが大切だと思った。これから社会教育活動に関わりたいという人が会議に来ることもあるため、聞き手側に負担を掛けすぎるのは良くないと思うが、今後、この活動が意味のあるものとして存続していくためには、聞き手側に頑張ってもらうことは、ある程度必要なことではないかと考える。次回、もし私が聞き手側に立ったときには、今回以上に主体的に参加し、有意義な会議となるよう努めたいと感じた。

報告者より（２）

①報告しているときにご自身が感じたこと

私の活動は、無ければ誰かが困るものではなく、生活にプラスアルファをもたらすものです。ですから、みな受け入れやすいものではあるのは気付いていましたが、今回は私の活動にそもそも興味をもったわけではない方々が相手です。どのような反応があるのかが楽しみでした。

20代の女性、シニアの女性、40代の男性、50代の女性。

結果的に、グループの皆さんが後半では目を輝かせて聞いてくださり、質問も多く、私の活動は間違っていない、市民のニーズもあることが肌感で感じることができました。

②報告後、ご自身の感じた気づきや変化、思いついたことなど

リバーステーション構想について、すぐく評価をいただきました。これまでいろんな方とお話をしても、そこまで得られない反応でした。お話ししてきた方々は市外の方が中心でした。

私は昭島市を盛り上げたい目的でこの活動をしておりませんが、やはり昭島市民の方々ともっとお話しをし、反応を見ながら進めることが重要だとの気付きがありました。

③全体的な感想

他の市民団体の方の活動を知れたことが良かったです。

◆その他

このような集まりは他にもいくつか存在し、参加したことがありますが、今回の企画の「あきしま会議」をそれらと比較すると私には以下の2点の特徴があると感じました。

- ①昭島市民に絞っていること。また昭島市内の活動であること。
- ②行政側の市の教育委員会が主催されていること。

①については前段で触れましたが、上記②の有効性、優位性、特徴をさらに生かすといいのではないかと感じました。それは他の同様の企画にはできない、各活動に関係する市の行政部門の方との交流や、連携、アドバイスが付いてくる、など。

市民の熱意・行動を行政が後押しし、連動する状況が生まれるとすごくありがたいです。そうすることで、あきしま会議の魅力が向上し、参加したい市民団体の方や構想を温めている方の参加がどんどん増え、さらに活動の成果も向上して昭島市の繁栄につながるという成功へのスパイラルが生まれる気がします。その可能性を感じました。

ファシリテーターより

①話題になったこと

ラウンド 1

- 社会教育とは何かと疑問に感じた報告者のスタートに興味を持った。大学院の入試で教育学の勉強をしている時に、なじみのない社会教育という分野が教育学の中で勉強範囲が多岐にわたることを知り、また、授業でも社会教育と思われるものが分割されている。例えば、地域の自治会などの市民自治を掘り下げる先生や市民の公民館活動に特化して授業をする先生など。広範囲にわたっている社会教育とはなにかと疑問に感じた。
- 社会教育委員の活動とともに、昭島市内の小学校土曜日補習教室で活動している方のアクティブさに特に報告者の方が感嘆の声を漏らす。学生でここまでアクティブならば、社会人となってからの可能性は計り知れない。
- 社会教育委員に応募するきっかけとして、公募されているのは市報で知っていたがその時は公募には至らなかった。たまたま、選挙の立合い人として一緒に投票所で仕事をした元社会教育委員に「応募してみたら」と背中を押された。
- 土曜補習授業の児童の集め方、報告書では毎回 30 名の参加とあるがどうやって児童をあつめているか？
先生方の声掛けが大きい。学校の勉強を苦手とする児童に朝の学活や授業内で常に先生が声掛けをしている。その他に子どもが集まる理由として、土曜補習授業のシステムがよいと思う。級別プリントにより、子どもが勉強をした達成感を得ている。1つプリントが終われば、次の上級プリントへ進むことができるので子どもが自動的にレベルアップできる。
- 学校の先生も顔を見せているので大事になる心配はないと思っているが、子ども同士のおしゃべりやふざけあいの注意の仕方について報告者からの投げかけがあった。
子どもへの注意の仕方に関しては参加者からも発言があり、子どもリーダー、もしくは青年リーダーなどに任せているとのことだった。
- 報告者が活動をされている中で嬉しかったことについては、学校外で補習授業に参加していた子どもに出会ったときに声をかけてくれたこと。授業が楽しかった子どもがお友

だちや兄弟姉妹を連れてきてくれたことなどを挙げていた。

- 採点の際の「花まる」については話が盛り上がった。花まるをせがむ子どもに◎付けをするという話から、経験談として、丸が何重か気になったと参加者から語られた。



ラウンド 2

- 本業はサラリーマンではあるが大学時代からラフティングを主としたアウトドア活動をしていて、現在は土日の副業として活動している。本業は副業のために必要だと思っている。妻の親の土地が多摩川沿いにあり、昭島に移住してきた。移住の決断は即決だった。
- メンバーは本人以外に同年代の知り合い 2 名、本人は川遊び文化、他の 2 名は釣り+焚き火名人、釣り+キャンプ知識のある釣り文化である。川に関する知識も経験も異なっているが子どもの同級生つながりでもある。
- 多摩川をメインで活動するので、多摩川の一斉清掃に参加している。自治会や地域の方は川の堤防沿いの清掃、多摩りばクラブは河川の中や中州のごみ拾いに参加。ウエットスーツがあるので一般参加者とは違うことができる。河川の中にはペットボトルや缶、BBQ ゴミが破棄されている。驚いたのはマグロの頭が捨てられていたこともある。
- 活動の中で、子どもたちにヘルメットを着用させることについて、川遊び文化と釣り文化で意見が分かれた。釣り文化ではヘルメットの必要性を感じていなかったが、川底の石に付着しているコケに足を取られて転び頭部を強打する危険があるのでヘルメット着用を納得してもらった。リスクを排除して遊ぶことが川遊び文化。
- 多摩りばクラブを立ち上げるにあたっての大きなきっかけは、20万円の投資で起業塾に通ったこと。この投資を無駄にできないと思った。また、塾を終えてから塾生が何らかのアクションを起こさないとならないような塾のムードも後押しとなった。
- 今は川遊びで毎回川の場所は違うが、拠点となるような場所（リバーステーション）を作って活動したい。ランナーや自転車アスリート、釣り、川写真など川遊びにかかわらず川を利用する人が集える場所があれば最高という参加者の声があった。

②グループの様子

- グループ内で一通り質問は出ており、全員参加していた。
- 報告者の方お二人とも活動が活発だったので質問は多く出たが、一つのことを突き詰める議論にはならなかった。
- 報告書と話し合いの中で昭島市の事業の課題となることが見えてきた
 - 1) 小学校土日補習授業・・・ボランティア講師の教え方のバラツキについては講師たちが不安に感じている
 - 2) BBQ ゴミ対策が十分にされていない
 - 3) 線路の北側市民はリバーサイドあきしまという市民意識がない

4) 河川敷利用者、堤防通過者の調査

③ファシリテーターが感じたこと

- メモをとるのが難しかった。
- みなさん、よく参加してくれていた。笑顔も出た。お茶やお菓子のような和やかさを演出する工夫もあればよかった。



5 グループ

【活動報告】

- 小中学校における茶道体験のあり方について
- こどものサロンび～の（福島町）

報告者より（１）

①報告しているときにご自身が感じたこと

- ・参加者５名とファシリテーター１名 計６名により、６つの共通項目にそった報告者の表題に沿っての報告と話し合いは初体験でしたが、１ラウンドの時間が５０分では短いように感じました。（話し合う時間が足りない）
- ・多くの人は 茶道は敷居が高い文化活動で割と裕福な人達のための活動というイメージが定着してしまっていると改めて感じました。実際には私のようなたいした道具も茶室もないサラリーマン茶人でも「茶道の精神を学びたい」・「茶道の実践を通じて人間形成を図りたい」・「師範になれば茶道を一般人に広めたい」と私が日頃考えていることをグループの人達に少しは理解してもらえたと思います。

②報告後、ご自身の感じた気づきや変化、思いついたことなど

学校での授業としての茶道体験にこだわらなくても、学童の課外授業やこどものサロンび～のでの和菓子作りとのコラボ等、今回の話し合いの中で解決策があるものだと感じました。しかし個人的な繋がりだけでは限界があり、行政的にコーディネーターを設置・充実することで、もう少し広がりが出来るのではという期待を感じました。

③全体的な感想

- ・こういった形式の実習は、私にとっては初めての経験で新鮮に感じました。
- ・アンケートにもあった開催頻度ですが、初期には年２～３回である程度スタートダッシュが必要であると思いますが、相応の経験をつめば年１回で構わないと思いました。
- ・黄色（いいな）と青色（共感）の付箋に各々書き出したが、ほぼ「いいな＝共感」ではないかと考えてしまい、私には明確に黄色と青色を区別して記載するのがとても難しいと感じました。
- ・もともとこうした会議に参加して学習しようとする人は、目的意識がはっきりしている人たちだと思われますが、私の知人に講座への参加を無理やりではないがお願いしました。次回開催にあたりチラシに今回の事例の一部を載せるとか、市のホームページに掲載するとかの工夫が必要と感じました。

報告者より（２）

①報告しているときにご自身が感じたこと

今回、6名のグループで活動の報告をしました。報告中、他の方のお顔を見ながらお話ししたのですが、多くの皆さまは資料をご覧のままで中々視線が合わず、ちゃんと伝わっているかな？とやや不安になりました。

初めてで慣れない状況でしたので、例えばリーダー役の方から積極的に多めの頷きや質問などあるとよいと思いました。

②報告後、ご自身の感じた気づきや変化、思いついたことなど

自分自身にとっては、特別伝えたかった箇所ではないところに、注目が集まって質問を受けたことで、人間の視点というのは本当に多様なのだと改めて気づきました。

このような機会がなければ、お話しすることはなかった方々と出会い、その方の日常の活動や、活動の動機を教えてもらった事がとても良かったです。また、直接お顔を見ながらでしたので、なかなか聞くことのない運営のお話なども細かく知ることができました。

報告後、活動グループのメンバーと今回の会議についてお話しする機会がありました。活動を今後も無理なく継続していくためにはやはり、低学年の児童の参加やスタッフの増員が必要であることを話し合いましたが、実際にどのようにして周知・勧誘していけばいいのか解決策は出ませんでした。今後も、この課題に対して問い続けていきたいです。

③全体的な感想

近藤牧子先生から、日々の活動を記録して共有していく事の大切さを教わりました。忙しい日々の中、楽しんでいるとはいえ、お給料も出ないのに事務や記録・共有をして運営していく事は現実的にはかなりハードルが高く、若干綺麗ごとのようにも感じました。実際の現場では、市役所や社会福祉協議会への報告でさえとても煩わしいものです。記録や報告が成長につながると理解できる反面、時間やお金の無さで一番後回しになってしまいます。逆に、この部分を市役所や社会福祉協議会のスタッフさんがインタビューに来てまとめてくれたらどんなに楽だろうかと、わがままな発想が浮かびました。

報告後に、テーブルメンバーから書いてもらった報告の感想がとてもうれしかったです。何か、あの場の新鮮な空気や状況を持ち帰ってこられたようで、何度も見返しています。

長く活動されている団体さんからのアドバイスや、現在の課題を聞くことで自分たちの今後を想像できました。

び〜の以外の自身の活動でも今回体験できたことを役立てていきたいと思いました。

①議論したこと

＜茶道連盟＞

- 茶道体験の機会を提供しているが、なかなか茶道の広がりにつながりにくいことが課題。体験後の継続を促すため、教室の紹介などはおこなうものの、現代の子どもたち・人々はほかにも楽しい事を様々経験する機会があり、茶道を体験したから茶道を続けたいとはなりにくい。
- 単発の体験講座があることによって、日常の中に茶道への「入口」が用意され、子どもたちをはじめとする参加者は知り親しむきっかけをそこで得る。子どもにとっては「茶道を体験したことがある」という自信にもつながる。
- 指導する側としては、茶道を通じて「道」を教えたい、資格を持ったからには「教え」を広めたい、という気持ちがあり、それが原動力。
- 学校教育、社会教育ともに外部講師を招く予算が不十分。体験講座を実施するとその経費は持ち出しになることも多く、持続可能な運営をしていく上での課題。
- 学校教育では多忙化に伴い「文化」から削られていく現状がある。茶道体験の実施も基本的には校長先生をはじめとする先生方との個人的なつながりに依存しているのが現状。

＜子どものサロン ビーの＞

- （「ビーの」の活動に参画することで地域とつながりができたという体験談から）結婚していなかったり子どもがいなかったりすると、地域の情報や人間関係が限定的になりがちで、「地域で何かやってみたい」と思ってもきっかけを得にくい。地域活動に参加しても「怪しい」と思われるなど、社会教育の当事者になれない。結婚していない、育児中でない人が「地域が好き」「そこに住んでいる人が好き」という気持ちを持つこともあるし、本来、人とつながることは誰にとっても大切だが、結婚、育児していないことから地域での孤立につながる。
- 地域のなかに多様な人々の「居場所」があることが大切。人間関係が広がったほうが楽しい人生を送ることができる（気がする）。
- 地域でつながりあうことは、その人自身のためだけではなく、地域全体のためにもなる。

②議論のポイントをファシリテーターがどう聞き取ったか

- 「日常の中にさまざまな体験の機会による『入口』を用意しておく」ことは、社会教育の大切な役割。それが何への「入口」となるか、何につながるかは、その人・場合によるが、「入口」があることで学びの可能性が大きく広がる。
- 社会教育を豊かに展開していくには、それを担う人々の幅広い参画が不可欠だが、人々の意欲や善意に期待するだけでは限界がある。金銭的な面も含め過剰な負担（感）を生

じさせない仕組みが必要。

- 結婚していない、育児していない人々を地域が排除している現状がある。社会教育の担い手・学習者として多様な人々が参画できるような工夫が求められている。それにより、個々人の人生が豊かになるだけでなく、多様な大人との出会いが子どもたちの世界を広げたり、地域の在り様が多様な視点から議論されたり、地域全体が豊かになる。
- 多様な人々の多様な「居場所」を地域につくることに、社会教育の可能性がある。

③グループの様子

- 報告者の話に対して、参加者それぞれの視点から質問や意見が出され、活発なやりとりがあった。経験や価値観の違いが垣間見える場面から学びあう雰囲気があった。

④ファシリテーターが感じたこと

- 「市民ニーズ」に応える社会教育を考えるうえで、例えばコンピュータスキルを学びたいといった表面的な学習ニーズだけでなく、地域（の持続可能な発展）を担う人々を支える（エンパワーする）学習・教育としてどのようなニーズ・可能性があるかを掘り起こすことが大変重要。
- 今回、さまざまな地域活動を担う方々がどのような想いを持ち、どのような課題や限界を感じているかをお互いに聴きあうなかからそうしたニーズを掘り起こすことを目指したが、こうした場を持つことそのものが参加者の「エンパワーメント」につながることを感じた。
- 同時に、地域活動・社会教育を担う人々の負担（感）、地域活動・社会教育から排除されがちな人々の存在など、ここで出された課題に responding していくような社会教育行政のあり方を、社会教育委員会として検討していくことも重要。



おわりに

具体的な市民ニーズに対する方策を探るために企画したあきしま会議でしたが、ふり返ってみるとあきしま会議は、

- ① 市民の声を直接聞くことができる場
- ② 参加者の意見やアイデアを具現化に導くことができる場
- ③ つながりの醸成と情報を発信できる場
- ④ 支える側のネットワークと力量を形成する場 であったということができます。

参加者からは、団体の活動内容を知っておくことで人と人をつなげることができる、ニーズに応えられるなどの意見が多く寄せられました。

このことから、「あきしま会議」は、市民の主体性を尊重しつつ、「捉える」「活かす」「つなげる」ことができる場として、また、社会教育委員や社会教育活動に携わる者の力量形成の場としても、大いに期待できるものであると考えました。

そこで、昭島市社会教育委員会では、「あきしま会議」を社会教育委員の活動のひとつとして位置付け、継続して開催することとしました。今後は、市民ニーズに対する具体的な方策について協議を重ねるほか、団体等に所属していない個人についても参加方法等を検討し、昭島市民のニーズを活かして市民相互がつながることに寄与したいと思います。

昭島市社会教育委員会

市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議

実施報告書

平成30年9月20日

昭島市社会教育委員会議/昭島市教育委員会事務局生涯学習部社会教育課

発行：昭島市教育委員会事務局生涯学習部社会教育課

〒196-8511 東京都昭島市田中町 1-17-1

電話 042-544-5111（内線 2252）